

英語から見た内村鑑三

まえおき

この度はこの伝統ある関西の内村記念講演会にお招きいただきまして、まことに光栄に存じます。

只今は内坂先生からご丁寧な紹介をいただきまして恐縮しております。ご紹介にもありませんように、私は一介の英語教師でありますので、きょうは「英語から見た内村鑑三」という題でお話し申しあげてみたいと存じます。

ただ「英語から見た」と申ししても、「英語という言葉から見た」ということではありませんで、「その英語著作から見た内村」という意味であります。それも、実際には内村の英文著作の中のごく一部をご紹介しますという程度のことになるかと思えます。引用も少々長目になりますが、何とぞお許しただきたいと存じます。

内村鑑三は日本の先駆的プロテスタント・クリスチャンであり、近代日本の代表的思想家であるとともに、すぐれた英文家のひとりでありました。著名な英学者市河三喜は、「

殊に日本の文化史上に名を残した程の人で、英文家といわれる人は、といえば先づ内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉天心の三氏を推すに誰も異議はなからう」と言っています。

ここに内村がいかに深く英語に親しんでいたかを示す一つのエピソードがあります。彼のもとに住みこんでいたひとりの若い弟子が、真夏のある日、西陽がひどくさし込む部屋で昼寝をしていたところ、向いの母屋から声がかけて、内村からこう叱られたといいます。「陽がそんなに照りつけているのに、なぜそのすだれを下さぬ。君のコンモンセンスが、そのすだれをおろすことを君に命じないのか！」これをその弟子は「英文法式の叱り方」として、なつかしく思い起しています。因に、この若い弟子は皆様よくご存知の石原兵永です。

内村と英語

話の順序として、まず内村と英語の関係をざっとたどってみることにします。

内村が初めて英語に接したのは、彼が十二歳のとき、高崎藩の英学校においてでありました。この翌年（一八七三、明治六年）には

切支丹の禁制が撤廃されていますから、内村はまさに近代日本の夜明けとともに英語を習い始めたわけです。その後有馬英学校を経て大学予備門（東京大学の前身）に進み、その上級クラスでは外人教師M・M・スコットから、「スコット・メソッド」と呼ばれるすぐれた教授法によって英語を学び、彼の英語力、とくに作文力は大いに増大したのでした。

五年後、十七歳の秋、内村は北海道開拓使の募集に応じて、札幌農学校（北海道大学の前身）に第二期生として入学しました。Boys be ambitious! の名言をもって知られる教頭W・S・クラークはすでに日本を去っていました。第一期生たちの感化によって彼はここで初めてキリスト教に接しました。農学校では多くの外人教師から英語で講義を聞き、英語でレポートや試験の答案を書き、英語で討論やスピーチをするなど、徹底した英語教育を受けました。大学予備門に入ってからここを卒業するまでの数年間は、学業はもちろんのこと、日常生活もその大半はすべて英語であったと思われまます。

その後内村は、二四歳から二八歳にかけての四年間アメリカに留学しました。主としてニュー・イングランドのアマスト大学に学び、

理学士の称号を得て卒業しました。在学中に、総理 J・H・シーリーの感化によって回心を経験し、福音信仰を得て歓喜したことはよく知られたところです。アメリカ滞在中の生活については、彼の『How I Became a Christian』などに委しいですが、言葉で苦労したというようなことは全く語られてないので、恐らく内村の英語は留学前すでに十分実用に耐えるものであったと思われまます。在米中に『Moral Traits of the Yamato-damashi』(大和魂 II 日本精神の道德的特徴)その他二、三の英文を綴って、雑誌などに寄稿しております。"

帰国した内村は教育およびジャーナリズムに携わったのち、一九〇〇(明治三三)年に月刊キリスト教伝道雑誌『聖書之研究』を創刊し、以後一九三〇(昭和五)年七十歳で永眠するまで、日曜日の聖書研究会と、等身大と言われるぼう大な著述を通して、彼のライフワークであったキリスト教の伝道にその生涯を捧げたのであります。

この間英文の著作に関して言えば、こんにちすでにキリスト教ないし自伝文学の古典とされている前述の、内村の信仰自叙伝『How I Became a Christian』(余はいかにしてキ

リスト信徒となりしか)と、西郷隆盛、日蓮ら五人の代表的日本人を論じて、日本の精神的価値を世界に向って立証しようとした『Representative Men of Japan』(代表的日本人)の二著のほか、ジャーナリストとしては日刊紙『万朝報』英文欄主筆として預言的社会評論に健筆をふるい、『聖書之研究』誌には一九一三(大正二)年三月以降一九三〇年三月の最終号に至るまで、実に十七年間の長きにわたって毎号欠かさず巻頭に英和両文の短い信仰所感文を掲げました。ほぼ二百篇のぼりませんが、このうち最初の九年間の大部分を編集して一書としたのが『Alone with God and Me』(英和独語集)です。これを読んだあるドイツ人(A・アルバースという出版者)は、「この書を読むは、バッハの音楽を聞くようであった」と感嘆したと言います。また晩年(六六〜六八歳)の一九二六〜二八(大正一五〜昭和三)年には、自ら主筆となつて『Japan Christian Intelligencer』という月刊英文雑誌を発行しました。そのほか『愛吟』(Favorite Singing)と称する内村独自の訳詩集もあります。これは内村が若い時から愛誦していた英詩に自ら訳をつけて編集したものです。内村は自分の訳を「精神訳」

と呼んでいます。

『余はいかにして』から『インテリジェンサー』までの英文著作を通観しますとき、私どもはそこに内村の人と信仰の全貌を見わたすことができまます。と同時に、英文を通して表現された内村の思想と、彼の英文そのものの成熟の軌跡をも見てとることができると思います。もちろん、彼が英文を書いた時期には波がありまして、恐らく「万朝報」英文欄主筆時代と、『インテリジェンサー』発行時代とが二つの山であったと思われまます。

内村は以上のような著述にとどまらず、若い時には英語で日記をつけ(『余はいかにして』はこれをもとに成ったもの、その副題は『Out of my Diary』(わが日記より)、外国人にはもちろん日本人の友人に対してもよく英文で手紙を書きました。例えば、ことしはその百年記念の年になるいわゆる「第一高等中学校不敬事件」の当事者(内村)による最も確実で詳細な報告は、米国在住の生涯の友人 D・C・ベルへ宛てた次の英文の手紙によるものです。

この奇妙な儀式は教頭の new 案になるもので、従って私はこれに処すべき心構えを全く欠いていました。しかし私は第三番目に

壇上に昇って敬礼せねばならなかったため、ほとんど考慮をめぐらす暇もなく、内心ためらいながらも、自分のキリスト教的良心のために無難な途をとり、列席の六十人の教授（すべて未信者、私以外の二人のクリスチャンの教授は欠席）及び一千人以上の生徒の注視をあびつつ、自分の立場に立って、敬礼しませんでした！ おそろしい瞬間でした。……（山本泰次郎訳）

因にベルの名前はデイヴィド、友情の人でありたいとしてつけた内村のクリスチャン・ネームはジョナサン、二人は「デイヴィド・ジョナサン・フレンドシップ」に結ばれたライフロング・フレンズでした。彼はまた英字新聞や英文雑誌に寄稿、投稿することもしばしばでした。とくに札幌農学校時代の旧友たちとは、晩年になっても共に集まるときには英語の聖書を朗読し、英語で祈りを捧げるのが常であったと言います。そのひとり宮部金吾は「心中の情緒や思想を最もよく言い現わすには英文に限ると私共は思ってた居た」と語っています。こうして内村は生涯にわたって英語を離れることがありませんでした。「英文法式の叱

り方」をしてしまうほどに、英語で感じ、英語で考え、英語で書き、英語で語りました。とくに内に溢れるもの、深い感情や強い感動などを表現するには、どうしても英語によらざるをえなかったほどに、英語の人であったのです。

内村の英語観

なぜ内村たちは「心中の情緒や思想を最もよく言い現わすには英語に限る」とまで思っていたのでしょうか。なぜ内村は生涯にわたって、あれほどに英語でものを書いたのでしょうか。長期間の学習と滞米生活とによって、英語が自由に使えたということもあるでしょう。日本を世界に紹介するのに、英語は当然の媒体であったということもあるでしょう。しかし内村が英語を愛用したのは、決してそれだけではなかったと思います。彼には英語でなければ表現できない何ものがあつた、英語によらなければ伝達しえない何ものがあつた、彼の内にあつたのです。

内村はその最初の英文著作である『余はいかにして』の中で、こう告白しています。「私は高貴なもの、有益なもの、向上的なもの

のを、すべて、英語という媒介物を通して学んだのである」。

また『万朝報』英文欄主筆時代には、こうも書いています。「われわれが正直なところ非常に不完全な理解しかもたぬ言語で文章を書くというのは、あまりにもおこがましいことかもしれない。しかし、現代の思想の中には、わが日本語よりも英語によってよりよく表現できることがたくさんある」。すなわち内村は、英語には「高貴で、有益で、向上的なもの」がある、英語は「現代の思想の中の多くのこと」を日本語よりもよく表現しうる言語であると考えていました。この内村のいわば英語観が、彼にあれほど英語を愛用させたのであります。

ところで、いま読みました『万朝報』寄稿文の文体が内村のそれと違うということに、皆様お気づきのことと思います。これは翻訳文であります。きょうは英語原文はすべて省略し、翻訳だけで彼の文章を紹介させていただきますが、幸いこんにちでは、新しい岩波版全四十巻の全集に合わせて『内村鑑三英文論説翻訳篇』上下二巻が刊行されておりまして、内村の英文著述のほとんどを日本語で読むことができます。只今の文章もその上巻か

らで、亀井俊介訳です。なお下巻は道家弘一郎訳です。

話を元に戻しまして、内村の隠れた（これはあまり読まれていないと思いますので、「隠れた」と申しますが）名著に『外国語の研究』という小冊子があります。これは一八九九年の出版ですが、その前いわゆる京都貧乏時代に内村は『余はいかにして』と『代表的日本人』の英文二著や『愛吟』を著しておりまして、あるいはそれに触発されてこの本を書いたのかも知れません。これは外国語学習の意義と目的と実際とを、自分の体験に即して論じたものですが、そこで彼は自分がなぜ英語を愛するかを率直に語っています。

この論文は全部で八章から成っていますが、その一章（第四章）に「英語の美」というのがあります。内村によれば、英語は決して「美的言語」と言うことはできないが、英語には英語特有の美がある。それは「その発音においてあらずして、その意義においてあり」、「外貌に質素にして内裡に豊饒」なる点にこそ、英語の「深淵はかりがたきの美」があるというのです。そして内村はSublime, imagination, inspiration というような語を列挙して、適切な日本語の訳語の見つからない、

こうした「深き宗教的理由のその中に存することばの中に、実に英語の精神が宿っている」と論じています。

ここにその一例を挙げますが、それはsoul という語を説明したものです。これを読めば、私どもは内村の英語に対する傾倒の程を知ることができると存じます。

英語の美はまたその Mind, Spirit およ

び Soul の三姉妹語において見ん。もし

mind は心と訳し、spirit は精神と訳し得

べくんば、余は第三の soul に付するに何

らの漢字をもつてすべきかを知らざるなり。

第一は主として soul の識認的作用をさす

の語にして、第二はその情的作用を言うの

語なり。されどもソールそのものを言いあ

らわすの語の吾人にあるなし。これを靈魂

と訳して、その内に明らかなる個人格（ペ

ルソナリテイ）を発見するあたわず。魂に

あらず、魄（はく）にあらず、精にあらず、

神にあらず、ソールはソールにして、これ

を他の英語に訳すれば individual (=indi-

vidable) すなわち分かつべからざるもの

なり。すなわち心霊界のアトムにして、こ

れをこぼつの力あるなく、これを割（さ）

くの利刀あるなし。すなわち吾人各個の自

由の存するところにして、人類たるの特権の附着するところを言うなり。英民族の自由観念は彼らのソールの定義より来りしものなり。彼らの称する個人主義なるものは、現今わが国において伝えらるるがごとき利己主義と称（とな）うるものにあらずして、ソール主義を言うなり。A MAN, 一人、永久不滅のもの、他人の干渉しあたわざるわが心中の一物、すなわち自我そのもの、帝王にも宿りてまた乞食（こつじき）にも宿るもの、これソールなり。人の人たる真価は彼の有するソールにあり。人命の貴重なるは、その内にソールなる靈物の宿ればなり。ソール、ソール、われにわがソールの特権を与えよ。しからざればわれに死を与えよ。

次に、内村が英語を愛したもう一つの理由をお話する前に、どうしても申し上げておきたいことがあります。それは英語の聖書についてです。

『外国語の研究』の最終章は「最良の英語読本―英訳聖書」です。内村はそこで、「最も簡潔にして、また最も高尚にして、最も純清なる散文と、最も莊嚴なる韻文とをまじ

え、ただ一書にしてその中に英語の粹を収めしものは、余は英訳聖書なりと信ず」と告白し、とくにジェームズ王の翻訳（私どもがふつう「欽定訳聖書」と呼ぶ一六一一年刊行の英訳聖書です）は英国人の「個人的希望と国家的思想」とが凝って成った「一種の創造的製作物」とまで激賞しています。

この英訳聖書が内村じしんの「最良の英語読本」であって、彼の英文を訓練したばかりでなく、その信仰と思想のすべてを生涯にわたって導き、保ち、養う源泉であったことは言うまでもありません。彼の英文はもちろん、その日本語でさえも、この英訳聖書の文体を深く刻印していると思います。

内村が英語を愛したもう一つの理由は、それが「平民的言語」であるということにありました。この点は第三章「平民的言語としての英語」において論じられています。

内村の言うところによりますと、言語には貴族的なものと平民的なものがあるが、英語は「その本源において非常に平民的にして非常に平等的」な言語である。第一に、英語はその綴字法においても発音法においても、きわめて不規則で洗練されていない。第二に、英語には「敬礼的ならびに階級的言語」がは

なはだ少ない。例えば人称代名詞にしても、一人称、二人称はそれぞれ「I」と「You」だけで、日本語のように相手によって呼称を変えることをしない。第三に、英語には「平民的言語」が多い。そしてここでも、彼は *home*, *gentleman*, *Lady*, *King* のような語を挙げ、とくに *independent* については次のように解説して、英語が平民的言語であるゆえんを説いています。

もしそれ平民的語類の長なる *independent* (独立) なる語に至っては、これまた英人獨創の語なり。仏人これを借りて彼の *independente* を作り、伊人、西人また *independente* を有すといえども、初めてラテン語の *dependere* よりこの平民的大文字を作りし者は実に英人なりとす。そは十七世紀の始めにあたって清党 (ピューリタン) なる古今無類の純潔党起こり、信仰の自由とこれに伴う国家の改造を唱えし時、彼らの大主張を言いあらわすに他に言なきももつて、ここに初めて *independence* (たよらず) なる新語を鑄造せしなりという。ゆえに清党の一派にしてクロンウエルの率いしものを独立党と言えり。彼らは最も高尚なる最も深淵なる意味において独立を唱え

しなり。政治的独立は彼らの第二第三の目的にして、彼らが生命を賭(と)して獲(え)んとせし独立は実に宗教的独立なりし。彼らは一人の眞価を認め、その思想を束縛するの勢力の、神を除いて他に存すべからざるを主張せり。彼らは実に自由独立をその根原において求めし者にして、後世、彼らの有せし聖志聖望なき者が、単に政治的に他国または他党の覇絆(きはん)を脱して、もって独立せりと思ふがごときは、独立なる高尚なる文字の発見者の決して肯(うけが)うべからざるところなり。

ここで、内村じしんの「独立」賛歌を() 紹介しておきます。これは先程の「*Alone with God and Me*」(英和独語集、一九二二年刊)の冒頭の一編で、「独立」と題され、内村じしんの訳によるものです。

金にもまさり
名譽にもまさり
知識にもまさり
生命にもまさる
ああ、なんじ独立よ
ああ王たちよ
ああ公(きみ)たちよ

ああ監督たちよ
ああ博士たちよ

なんじらは圧制家である

独り真理とともにあり

独り良心とともにあり

独り神とともにあり

独りキリストとともにありて

われは自由である

こうして内村は、英語の平民性について次のように結論しています。

英語はその本原において非常に平民的にして非常に平等的なり。この語を学ぶためには、余のここに語らんとするところにあらず。されども英語を学んでその平民的思想に感染せざらんとするがときは、ぶどう酒を飲んでその酒精を受けざらんとすると同一なり。

現代は英語があいかわらずブームの観を呈しておりますが、私どもは英語の勉強からいったい何を学ぼうとしているのでありましようか。

英語の美点として内村が見出した「平民的

思想」は、それから二十数年ののち、『イン

テリジェンサー』に載りました、『Love of

Common Things』（普通のものを愛する）

と、『The Commonest and the Best』（最も普通のもの

と最もよいもの）という二

篇のエッセイに美しくこだましています。そ

の一部をご紹介します。

わたしは、普通のものを好む。

わたしは、空気、水、大地を好む。

わたしは、普通の花、普通の動物を好む。

わたしは、草、すずめ、牛、羊を好む。

わたしは、普通の人、平信徒、労働者、家庭の主婦を好む。

わたしは、天才、非凡・異常な男や女を好ま

まない。

わたしは、貴族、高位聖職者、法王、監督、

大監督、博士、特別に神々しい人たちを好

まない。

神は最も普通なものである。われわれが

「彼」に人間の形を与えるときには、普通の

人間として表わすのである。彼の生みたま

える独り子イエス・キリストはごく普通の

の人であった。彼は大工の子であり、村人

たちは彼を村人のひとりとして知っていた。

彼は地上に監督猥下として現われたわけで

もなく、神学博士として現われたわけでも

なかった。地の王たちは彼を一顧だにしな

かった。彼の時代の教会は彼を破門し、彼

を十字架につけた。そして彼は普通である

がゆえに、人間の間における神の代理人で

あり、人類の王であり、全地の主である。

彼はあらゆる人間の、とりわけ貧しく苦し

む者の兄弟であり、聖職者の友であるより

は平信徒の友である。彼は人間のなかで最

も普通の人であり、代表的平民であり、理

想的平信徒であった。（道家訳）

内村の言う「平民的思想」とは、申すまで

もなく自由と独立と平等の思想であります。

そしてその思想の根柢は、人が individual

であるということである。そして人を真に個

人たらしめるものは、人の内にある soul で

ある。soulこそ人にとって何にもまして「高

貴なもの」である。この人間にとって最も基

本的で重大な思想を、英語は、他の多くの言

語にまさって、よく伝達、提供しうるもので

ある、と内村は考えていたのです。それが彼

の英語観であり、そこに彼の英語に対する尊

敬と愛がありました。だからこそ内村は、時

にはあえて日本語によらずに、英語で自分の

日本の偉大さは、自分の利益を世界の利益に従わせなければならぬことを十分に認識することにある。

世界が善くなれば、日本も善くなるであろう。

世界が悪くなれば、日本も悪くなるであろう。

日本の福祉は世界の福祉と最も密接に結ばれている。

世界の連帯性がますます増大しつつある現代において、他のすべての国々を犠牲にして一国を大きくしようとの考えは愚の骨頂である。

世界に仕えるために献げられた国―かつてそういう国があつたらうか。

そういう国だけが正當にキリスト教國と称することができ。すべての他の國は異教國、いや、異教國よりもっと悪い國である。(道家訳)

「キリスト教國」とはいったい何なのか、と思ひ惑わざるをえないこんにち只今、この末尾の言葉は実に示唆的であると思ひます。

それでは、内村はなぜ、早くからこのような考えを抱くことができたのでしょうか。文

学を論じた一篇「何ゆえに大文学は出でざるか」において、内村は日本に眞の文学がないゆえんを説き、にもかかわらず、それを克服して日本人が大文学を生み出す可能性は十分にあるとして、「要は世界精神の涵養と注入にあるのみ」と結論しています。これは何も文学のことに限りません。はなはだ自己完結的と言うべき日本文化が、世界において普遍的価値を獲得する道があるとすれば、それはただ「世界精神の涵養と注入」とよつて日本文化の精神的価値を独善的絶対化から開放的相対化へと轉換する以外にありません。なぜなら「世界精神」こそ個別を普遍へと高める力だからです。こうした内村の極めて現代的ないわば國際感覺は、彼の英文著作の至る所に看取することができます。

特殊が普遍へと高められるとき、そこには当然のことながら葛藤があり戦いがあります。厳しい自己批判も求められるであります。次に引用します内村の日本道徳批判はその一例であろうかと思ひます。

彼は「日本道徳の欠陥」と題する文章（『万朝報』所載）の中で次のように言つております。

日本道徳の最も顕著な欠陥のひとつは、

目上の人に対する目下の者の義務を教えることがあまりに多く、目下の者に対する目上の人の義務は、かりに教えることがあつたとしてもあまりに少ないことである。日本道徳の二大原則である忠と孝とは、臣下の主君に対し、子の親に対する、すなおな服従以外のなにもでもない。…：われわれは上にむかつては束縛され、下にむかつては自由である。頭はがんにがらめで、足は勝手しだい。このような原則の上に建てられた社会は、どうしてもたいそう不安定にならざるをえない。

こういう社会の在り方から、ひとつ重大な疑問が生じてくる。人民が自分の個人的価値を重んずるところに成り立つ現代の代議政体は、日本のような構造の國で、多少とも長期にわたつて効力をもつことが期待できるだらうか。

そして、日本の議會は「ほとんど議會と呼びえない」と批判し、

議會とは、必要とあらば君主の意志に反して、人民の意志を表現するものなのだ。人民の内なる伝統的な道徳と、彼らが自身のために採用した立憲政治という外的な衣裳

とをいかにして適合させるか―これは日本が解決を求められている最も困難な問題のひとつに違いない。内が外を抑えるか、外が内を変えるか。世界はかたずをのんで見守っている。(亀井訳)

と結んでいきます。もうかれこれ一世紀前の文章です。彼には「共和主義の精神」と題する英文の一篇もありますが、天皇制の問題を考えるとき、これまたはなはだ現代的な問題提起であります。

内村がここに指摘した問題が、そのまま現代の日本人の問題であることは申すまでもありません。例えば、戦争責任の問題を論ずるとき、どうして日本人は被害者意識だけが強く、加害者としての責任に思い至り得ないのか。声高に民主主義を唱えながら、なぜ日本人はいつまでも事大主義を脱することができず、主権者意識に乏しいのか。つい先日のいじめ裁判の判決からも感ずることですが、なぜ日本の学校ではいじめが起ると、いじめられる子供(弱者)にだけ問題があるとして、いじめめる子(強者)を制裁、教導しないのか。このような私どもの心性(メンタリテイ)は、正にここに内村の指摘した「日本道徳の欠陥」

の露呈ではないでしょうか。

話が少々横道にそれますが、日本語における横文字の氾濫はしばしば識者のひんしゆくを買うところですが、内村はこの点でもなかなか進歩的で、「なんぞ直ちにローマ字を採用してわが国語の同化力を増大せざる」とまて言っています。ただし彼の言う外国語の採用は、「物品の名称」ではなく「思想の語」のことです。内村の大胆な、かつユーモアあふれるローマ字の名文を紹介しておきます。

サブライムなる富士よ、我汝を望みて我が心、内に動く。我にクロムウエルのリバティを与えよ、我にワーズワスのインスピレーションを下せよ。我はイマジネーションの翼に乗りて、大日本の未来を歌わん。(『外国語の研究』)

「同化力の増大」は、しかし、日本が一方的に他国の文化を受け入れるというだけのことではありません。むしろそれによって、より良く日本の精神的伝統の真価を世界に知らしめ、その価値をして「世界精神」の確かな一部たらしめることでありましょう。内村没後六十年のいまも、日本の文化ないし精神面での交流はほとんど受容一方であると批判さ

れていますが、内村は早くから日本の文化を世界に紹介しようと努めた先覚でありました。先日は朝日新聞紙上にD・グッドマンという人が一文を寄せて、このごろ日本の文化は内向的になっていくのではないかと危惧し、「日本発英文雑誌の勧め」をしていました(四月八日付)。内村はその英文雑誌を一九二六年、いまから六五年前にすでに発行したのですが、『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』の発刊にあたって述べた次のことばは、よく彼の意図を語っています。

JCIは、われわれが日本の最善と思うものを世界に紹介し、そうして、世界の思想と世界の進歩に少しでも貢献しようとする企てである。(道家訳)

それでは、日本は世界に対して何を貢献しうるか。いや貢献すべきでありましょうか。内村は、これは実にもう一世紀も前にこう言っております。

日本は、アジアの東端で領土をさらに拡張する見込みがあるから、さらに偉大なのではない。人道(ヒューマニテイ)に対するさらに大きな奉仕、自国の使命のさらに高完全な達成、さらに高度な美徳とさらに高

貴な文明によって、日本はさらに偉大になるのである。他国が甲鉄艦や地球をとりまくほどの領土を栄光と考えるとき、自国の高潔さを信じて道徳の領域で偉大であることが出来るならば、日本にこそ栄光はあるのである。：あらゆる征服のうちで最も偉大な（そして最も有利な）征服は、意志と精神に対する征服である。島国的位置を占める日本は、（山岳の要塞に位置するスイスに似たものとして）、統一した種族の模範、東洋に対する西洋の先駆け、西洋に対する東洋の代弁者たりうるのである。（亀井訳）

先程の内坂先生の開会のお祈りに正にその通りにあつたのですが、この内村の先見は裏切られ、日本は甲鉄艦をもって偉大になろうとして挫折しました。幸いその教訓に学んで、平和国家として生きるべく私もみな努力してまいった筈であります。この度の湾岸戦争を契機として、私も日本人は、もう一度その経済一辺倒の一国平和主義を問い直されていることは、皆様よくご承知のところ。この重大な時に、内村は再び愛する日本人にこう訴えかけられているように思われますが、い

かがでしようか。「諸君は何をもって世界の思想と世界の進歩に貢献しようとするのか。九十億ドルか、それとも自衛隊の派遣か。世界の平和に貢献するの道は金でもなければ軍事力でもない。ただ意志と精神、誠実と徳とによるのみ」と。

内村の信仰

ところで、内村はあの「二つのJ」という論文の中で、先程引用した部分に続けて次のように言っております。

イエスと日本、わたしの信仰は一つの中心をもつ円ではない、それは二つの中心をもつ楕円である。わたしの心情と知は、この二つの親しい名前のまわりを回転する。そして一方が他方を強めることを知る。イエスは、日本に対するわたしの愛を強め清める。日本は、イエスに対するわたしの愛を明確にし目標を与える。この両者がなかつたならば、わたしは単なる夢想家となり、狂信者となり、漠然たる一般人となつたことであろう。

イエスはわたしを世界人とし、人類の友とする。日本はわたしを愛国者とし、それ

を通して固くわたしを地球に結びつける。わたしはこの両者を同時に愛することによって、狭くなりすぎることもなく、広くなりすぎることもないのである。

内村の晩年のよく知られた日本語論文に「楕円の真理」というのがありますが、内村は決して「一つの中心をもつ円」の人ではありませんでした。イエスと日本、日本と世界、個別と全体、特殊と普遍、内向と外向これら二極の間で激しく葛藤しながら、これら二つの中心をそのまま己が中心として、広やかな「楕円の真理」に生きた人でした。

最後に、そうした内村のダイナミックな信仰の秘密を明かすような、珠玉のエッセイを二篇ご紹介したいと思います。その選択は全く私の恣意的なものです。いずれも内村晩年の円熟した思想を語る、非常に英語らしい、英語だからこそ語り得たと思われる論説です。これは道家訳ですが、内村と文体が違うので、ほう、これが内村の文章かと思われたり、成程いかにも英語的な表現だなと思ったりしていただければいいと思います。私にこれを要約してご紹介する力がないので、適当に拾い読みをしていきます。長くなりますが、お許

し願います。

一つは「わたしはキリストをどう思うか」
(What I think of Christ) という題で、
イエスが弟子達に「あなたがたはキリストを
どう思うか」(マタイ二二・四二)と問われ
た、その間に内村が答えたものです。

第一にわたしはキリストを完全な人間だ
と思う。哲学者だとは思わない、科学者と
も、芸術家とも、政治家とも思わない、ま
して神学博士や社会改良家とは思わない、
ひとりの完全な人間であると思う。彼の完
全性や思考やこの世的な活動の領域にある
のではなくて、意志にある。カント的な用
語を使えば、キリストは完全に善意の人で
あった。わたしは彼のなかに罪を見出すこ
とができない。彼は愛し赦すことができた。
彼は自分のことは全く考えず、もっぱら他
人のことを考えた。彼は自分自身を救うこ
とはできなかつた。が、他人が救われるた
めには自分の命を与えることができた。彼
自身の利益がかかわっているときは弱く無
力であったが、他人が危険にあつて滅びそ
うなときには強い神の子であった。彼は神
の子であつたけれども、自分自身を無きも

のと考え、もっぱら他人のために生きた。
わたしは人類の記録のなかに彼に似たもの
を見出すことができない。

わたしは、わたしが知る多くの男女を賞
賛するが、イエスは崇拜する。わたしは彼
を賞賛するだけの価値もない。また彼はわ
たしごときに賞賛されるにはあまりに尊い。
が、イエスを崇拜することによって、自己
をおとしめるように感じないのは事実だ。
それどころか、彼を崇拜することによって、
自分の名誉も地位も高められるのを感じる。
イエス崇拜は英雄崇拜の最高の形態である。
それは偶像崇拜ではない。それは、「すべ
ての人を照らす光が、世に来た」(ヨハネ
伝一章九節)のに対して、人間が心から捧
げざるをえない正当な礼拝である。
そして、イエスの完全性は次の点にある、
すなわち、わたしは彼をわが主、わが師と
して崇拜すると同時に、彼をわが友として
持つことができることにある。いかなる人
も彼ほどわたしの心に近づくものはない。
わたしの父や母、妻や子、いちばんの親友
でさえも、彼ほど親しくわたしの心に訪れ
はしない。彼は最も厳格な判事であり、最
も柔和な友人である。たとえどんなに深い

墮落の淵に落ちても、援助と同情を求めれ
ば必ずやわたしの手の届くところにいたも
う。彼はわたしの内奥の魂を知り、わたし
のなかにあるどんなわずかな善のためにも
わたしを迎え、わたしのなかに見出す大き
な悪のためにもわたしを捨てたまわらない。
その点において彼はまったく他の人、また
はすべての人と異なる。

彼の完全性の美しさを考えていると、彼
がユダヤ人であつたことなどは無限の彼方
に遠のいてしまふ。彼はイギリス人でも、
アメリカ人でも、シナ人でも、インド人
でも、西洋人でも東洋人でもよかつたであ
ろう。わたしにとつては全く同じことである。
彼はひとりの人間、たんにひとりの人間、
人間そのもの、「人間」、すなわち「人な
るキリスト・イエス」(テモテ前書二章五
節)であつて、友人の最も親しきもの、そ
れゆえに私はイエスを愛する。

第一のキリストの人間性に対して、第二は
キリストの神性について述べています。

第二に、わたしはキリストを「人なる友
」と考えるのみならず、また「神なる救い
主」と考える。わたしは自分のなかに、ど

んな友情も、神の友情さえも取り除くことのできない、あるものを発見する。そのあるものは、どんな人間的手段によっても除去できない、一つの霊的な病気であると感ずる。わたしはそれを罪と呼べと教えられた。そしてその名で呼ぼうと、なにか他の名で呼ぼうと同じである。罪はたんに罪深い行為とかふるまいだけではない。罪への傾向でさえない。それ以上の何物かである。それは人間性の一部であり、人間性の基礎そのものであるように思われる。わたしがなぜ、またどうして罪のなかへ生まれてきたのかは知らないし、また知ることもできない。「前世とそこにおける墮落」ということで一応の説明になるかもしれない。が、それではまだ不可解である。わたしが罪にありて、罪のなかへと生まれてきたことは事実であつて、わたしの存在の他のどんな事実によらず否定することはできない。わたしはその不愉快な事実を目をつぶろうとする。が、その事実は厳然と存在し、わたしはそれから逃れることはできない。こういう事実の感覚がわたしのうちにあることに対して、あらゆる種類の心理学的また病理学的説明が提供されたが、すべては無効

であつた。わたしは罪ある人間である、たとえ本来的にはないにしても、実際に。それゆえなんとかこのような状態から解放されなければならぬ。さもないと、わたしは生きることができない。いかにしてわたしの罪から解放されるか、これは問題中の問題である。

これは私の知る、人間の罪について語られた最も深い考察の一つです。

そして次に、内村はこの罪の解決をキリストの贖罪の中に見出したと語ります。

どういう説明がなされるにせよ、わたしは、罪の、わたしの罪の問題の実際的な解決を、神の子の贖罪の死のなかに見出した。道徳にも、わたしが接しえたあらゆる形態の宗教——教会のキリスト教も含めて——にも見出しえなかつた後、わたしは、わたしの死にいたる病がほんとうに効果的に癒やされるのを、キリストの十字架によってわたしに提供された救いのなかに見出したのである。一つの声がわたしに言った、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる、と（イザヤ四五章二二節）。わたしはその声にしたがつて仰ぎみた。すると見よ、そ

こに平安があつた！ それはまことに単純であつた。考えられるあらゆる霊的過程のうち最も単純なものであつた。子供がその母親の顔を見るように見ること——この仰視だけでわたしは救われた。

このようにして、キリストはわたしの神なる救い主でありたもう。わたしが信仰をもつて十字架のキリストを仰ぎ見るときに経験する、わたしの存在のこの根本的な変化を、だれもわたしに行ないえなかつたであろう。わたしにとつて、それは奇跡であつた、そして今もあい変わらず奇跡である。わたしがわたしの回心と呼ぶこの奇跡に比べたら、他のすべての奇跡はさほど重要な問題ではない。回心は魂の新たな創造である、一つの宗教から他の宗教への変更ではない。

わたしはキリストの弟子である、いや弟子以上のもの（あるいは以下のもの）である。すなわち、わたしは彼の僕、彼の贖いの血によって買われた奴隷（*dooulos*）である。わたしは、いまや昇天のキリストとしてこの世にいまし、またわたしのうちにいましたもうナザレのイエスを、「わが主、わが神」として、良心をもつて呼びまつる

ことができると思う。

ここには、内村のイエス・キリスト観が実に明瞭に、しかも熱い思いをもって告白されていると申せましょう。

それでは、このキリスト観から生れた内村の信仰ないしは内村のキリスト教はいかなるものであるか、それを示すのが次にご紹介する「霊と形」(Spirits and Forms)と題する一篇であると思います。

わたしは霊を重んじ、形を重んじない。形は大変ひとを欺きやすい。最も悪い霊でも最も美しい形をとったものがあり、最も美しい霊でも最も醜い形をとったものがある。われわれは、それがとる形によって霊を判断することはできない。近代的なものの見方の誤りは、形に注意を払わずに、「霊を知る」能力が乏しすぎることにあると思う。芸術と芸術的なものに対する現代の熱狂ぶりは、人類がいまや形を追い求めて霊を追い求めない——万人が美しく見えることを望んで、美しくあることを望まない証拠である。振舞 (behaviour) という言葉は、好んで用いられる心理学用語であるが、現代人の趣味にびったりと一致してい

る。こういう美しい形の崇拜——これは現代において復活したヘレニズム(ギリシア主義)にはかならない。

そして形にはいろいろある。肉体の優美さや完全さだけでなく、美しい、不快の念を起させぬ文体、人を傷つけない話し方、誰にも好感をもたせる技巧など、——これらはみな現代人によって大いに求められているさまざまな形である。

この形についての言い方などは、いかにも内村らしいユーモアであると思います。

欧米の近代のキリスト教徒にとって、形のないキリスト教は全然キリスト教ではない——それは星雲のような、漠とした、夢のような存在で、事実上存在しないものである。

しかし不思議なことに、聖書のキリスト教は、わたしの知るところでは、本質的に霊的であり、ほんの少し形式的であるにすぎない。それは、ある人の言ったように、「九割が霊であり、ただ一割が肉である」。わたしにとって形は、礼拝の助けにならないのみならず、積極的な障害になる。声

をもつ霊(静かな細い声「列王紀上、一章一二節」)と言葉(直接的な霊の交わり)は、礼拝の対象物や、あるいはそのため(の形(儀式)がなくとも、十分である。わたしは、内面的には霊において神を拝し、外面的には通常の人間的行動において神に仕える。

そしてプロテスタンティズムとは、この形なき霊的信仰ではないのか。そのプロテスタンティズムが現代において無力となり効果を失った原因は、みずから形を放棄したと宣言しながら、形を採用していることにあるのではないのか。イギリスのプロテスタンティズムのみならず、全ヨーロッパのプロテスタンティズムは中途半端な運動に終わり、今日にいたるまで半分プロテスタントで半分カトリックの状態にあるといっても、間違いではあるまい。そして、半分改革されただけの宗教改革くらい不愉快なものはない。その論理的帰結にまで徹底されたプロテスタンティズムは形なき宗教であるに違いない——純粋に霊的であって、霊のことは霊によってのみ判断される信仰である。

ここの「内面的には靈において神を拝し、外面的には通常の人間の行動において神に仕える」という言葉は、無教会信仰の真髄―万人祭司・伝道者主義、世俗に生きる信仰―をよく伝えていると思います。

また「その論理的帰結にまで徹底されたプロテスタンティズムは形なき宗教であるに違いない」という文章は、口を極めてカトリック教会を称揚しながら、「われはカトリックにならず」と言った内村を思い起させます。次の指摘なども、常識人内村らしいと思います。

形式主義が物質主義に陥る危険性はあるかもしれないが、その本質においてそれ（靈性）は、あらゆる存在のなかで最も確実なものであり、健全な思考と有効な行為の基礎として十分に頼ることのできるものである。

そして最後に、内村は日本における四十年にわたる自らの伝道事業を語って、この靈的キリスト教について、

よりよい名称がないので、わたしはこの形なきキリスト教の形を「無教会主義のキリスト教」と呼ぶ。しかし実質には、名称

以上のものがある。それは否定的な信仰ではない。積極的な信仰である。

と主張しています。

「無教会主義のキリスト教」があるとするば、これ以外には有り得ないでしょう。内村のこのようなキリスト教が始まってほぼ一世紀になるのでありますが、無教会の理念、無教会の論理、あるいは無教会の名称などの問題がやかましい昨今、私どもはもう一度、この内村自身の単純明快な説明と表白に立ち返ってみるべきではないかと思いますが、いかがでしょうか。

むすび

「英語から見た内村」、英文著作を通して見た内村が、内村鑑三その人と異なる筈もなく、私どもがよく知っているあのなつかしい内村であることは確かですが、ただ英語による自己表現は日本語の場合より一層率直で、ユーモアが感じられるように思います。彼はユーモアを「余裕」と訳していますが、英語は自分の文化ではないので、その分自分を客観視できる、それがユーモアになるのでし

よう。これは私の勝手な感想ではありますが、内村という人の人となりは硬質で強靱、その雰囲気は乾燥していて、極めて明るい。人間と世界には徹底して悲観しながらも、常に

「朝は来る、主は来りつつある」と確信する樂觀主義者で、それゆえに万事に積極的な人間であると言つてよからうと思えます。そして何よりも、内村鑑三はまぎれもなき「日本的キリスト教」の信徒であり、イエスの弟子として、「すべては神のため」に生きた「ソール」の人であつたと存じます。

（所載）「森の宮通信」

第219号 一九九一年七月
第220号 八月
第221号 九月

森の宮通信社 四条畷市

